

氏名	宮後 浩
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲第 14 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
論文題目名	建築透視図の役割特性と制作構造に 関する考察
審査委員	主査 教授 加藤 力 副査 教授 池田 有隣 副査 教授 中村 隆一

## 論文の内容

### 論文の構成と要約

本論は、第1章序論から第8章結論に至るまで8章で構成される。  
各章の流れにそって、それぞれの概要を以下に述べる。

#### 第1章 序論

研究の背景から目的と方法、さらにこの論文の用語の定義、参考文献によって構成される。

パースは、現実に忠実に描くことはもとより、設計者の頭の中のイメージ、つまり図書にもしめされていないものを絵に描くことを求められることがある。

しかし、図書に描いていないものの表現方法については、常に制作者の経験と能力によるものであると片付けられ、具体化している内容は存在しない。

本論の目的は、それを具体化することで、設計者が求めるイメージ、つまり図書にも示されていない雰囲気や正確に汲み取り、熟練者だけが兼ね備えているとされてきた「手描き」のパースを描くための「経験と能力」による内容を体系的に整備することである。

方法は、利用目的別、物件別のパースを提示し、プロジェクトプロセスにおけるパースの現状を分析し、パースの評価基準を整理、考査することから始める。  
さらに、その評価基準を元に、実際のパース制作の実例からその要素を抽出し、整備していくことで、「経験と能力によって描かれていた内容」を整理し、体系化できるかを試みる。それを踏まえ最終的に今後のパースの行方、問題点を言及したい。

#### 第2章 パースの種類と役割

コミュニケーションツールとして一般的なパースの概念と必要性やその役割を提示した。その上でそれらを裏付けるべく、利用場面に沿った利用目的別のパースの必要性と役割を整理・考査している。

さらに対象となる建築物によって必要性や役割が使用対象別のパースの必要性と役割についても整理・考査し、その内容を明確化することを試みている。その際、利用目的別、対象となる建築物別に、それぞれのパースについては実例を取り上げている。

#### 第3章 プロジェクトプロセスによるパースの位置付け

建築物のプロジェクトプロセスによって描かれるパースもそこにかかわる専門家の顔ぶれも異なることを提示した。

まずプロジェクトプロセスを構想、企画、設計、施工、竣工、販売・広報と区分し、それぞれの段階で使用するツールからそこで求められる内容を検証した。そのために

パースが制作者と発注者、そしてプレゼンの対象者のなかでどのように認識されているかを分析し各プロセスでのパースの特徴を導き出した。ここでは、発注者と制作者との打ち合わせごとのパースの実例も提示し、効果的な技法、技術の検証も試みた。

#### 第4章 パースの評価方法とその要素

前章までの内容を踏まえ、一般的に「良いパース」といわれる定義、パースがどう認知され評価されるのかを考察してみた。

まず、パース制作者が考える「良いパース」について整理すべく、パース制作の従事期間も長い、ベテランの制作者にお集まりいただき、「パースとは何か？」というテーマでワークショップを実施し、パースを持参いただいた上で専門家がパースをどうとらえているかの情報を収集している。その内容を整理し、制作者の表現者としてのオリジナリティについて、整理・考査した結果をまとめた。

さらにこの結果を踏まえ、パースを評価するのは発注者、つまり設計者なのではないかという仮説をたて、今度は、発注者にご協力いただき「パースのとらえ方」に関するワークショップを実施した。その内容もまとめパースの評価について整理・考査をした。

最終的に「良いパース」といわれるものの評価基準は設計者のイメージを的確にとらえていることであるものはもちろんのこと、その目安として必要不可欠なのが、打ち合わせによる「言葉」の解釈であり、その正確な形象化という結論に達し、その経緯をまとめている。

#### 第5章 イメージを具現化に導く言葉の形象化

前章での結論を元に、設計者の言葉にこめられたイメージを正確に形象化する方法を検証した。検証には、建築業の現場の打ち合わせ内容とそれに沿った実際のパースの段階的実例を発注者と制作者の打ち合わせ内容と共に取り上げ、その経過からキーワードとなる言葉を抽出してイメージをどのようにして形象化していくかの実例をあげている。

#### 第6章 強調と省略

更に、そこからパースには、言葉の形象化するために必要なもうひとつの重要な表現のポイントとして「省略」と「強調」があるのではないかという、新たな検証内容を見出し、その考察を試みた。

そのために、数多くの作品群から強調と省略が明確な部分を抽出し、その分類を実施した。その分類内容から、強調と省略は相反するようであり同時にデフォルメする目的で存在するという結論を導き出した。

#### 第7章 イメージの体系化

前章の言葉の形象化、省略と強調を組み合わせるとイメージの体系化に繋がるのではないかという仮説を立て、検証を試みた。

結論に達しているように、省略と強調は同様のことを表現する目的で存在している。つまり省略があるところには強調があり、その逆も言える。

これを一つの軸としてパースの打ち合わせにおいて形象化に繋がった重要なキーワードを列挙し、その軸にあわせてレイアウトを繰り返した。その結果、最もの確かつ一般的にも違和感の無いパースのイメージスケールに到達した。このパースイメージスケールによってこれまでケース・バイ・ケースで制作者の経験と能力で描かれるとされて、それ以上語られていなかった部分を明確にした。

## 第8章 結論

第2章から第7章までの各章ごとに整理・考査して導いたイメージスケールに達するまでの内容の整理と提示を行なったうえで、総括を結論としてまとめた。

さらに最終的なパースに残された課題と今後の手描きパースの行方を言及した。

## 学位論文審査報告

### 学位論文審査報告

建築物は通常、受注生産を原則として、一つ一つが設計者によって、その都度、設計図に描かれ、それに基づいて施工、生産されるという性格を持つ。その過程で幾多の透視図（以下パースと称す）等が制作され、それは多種多様な伝達手段として用いられてきた。もともと建築透視図は設計者自身の「手」より自ら描かれてきた性質のものであった。しかしながら、いつの頃からか次第に建築設計の分業化が進み、建築透視図にあってもそれを専門に職とする者によって表現されるようになった。

論文申請者もこの建築透視図制作専門家として、40年近くを実務で過ごして着た実績を持つ者である。

さて、この建築透視図は従来、手描きで行われてきたものの、近年パソコンによるCG（コンピュータグラフィックス）にとって替われ、次第にそのウェットが大きくなりつつある、という実態がある。こうした社会状況の中で、本研究は手描きの透視図の持つ「本質的意味や役割」及び「制作プロセスの構造」を取り上げ、従来誰にも論じられてはこなかった全く新たな視点から、極めて綿密に分析考察を加え、論考を展開し、それを普遍の域までに導いているものである。

論文は1章から8章で構成される。

第1章は研究背景、パースの歴史、パースの現状と課題、研究の目的と方法、あるいは本論文で用いる用語の定義などについて取り上げ、通常の学位論文の手続きを踏んでいる。

第2章は「パースの種類と役割」で、ここでは今日まで、描かれてきた多種多様な自作の（あるいは自分で経営する事務所）建築透視図（260点）を取り上げ、それらを、使用目的、建築機能種別、規模、提示目的などの上から分類を試み、それぞれの透視図に求められる「役割」に関し考察を行っている。

第3章「プロジェクトプロセスによるパースの位置づけ」から本題に入る。まず、建築設計計画プロジェクトの発生から完成までを7段階（構想、企画、計画、設計、施工・管理、竣工・販売、使用）に区別することを試みている。ついで、各段階で制作される、建築透視図の制作主体者を明らかにし、その制作目的と要求機能について論考している。

未だ建築設計図書等がほとんど無い状態における「構想」「企画」「計画」（計画段階では簡単な図面は準備されている）段階において、「手描きパース」は、その「存在理由や有効性」が発揮されると、断じている。この見解は独自で新たな知見と、見ることが出来る。

第4章「パースの評価とその要素」では、この博士論文作成のために開催されたワークショップ（2回、21人）とシンポジウム（1回、176人）において、おおくの建築設計関係者（施主、企画者、設計者、パース制作者、その他）から得られたヒヤリング及びアンケート調査によって導き出された結果が採用されている。

幾つかの評価項目が抽出、検討されているものの、結論として、「パース評価の基準は、設計、企画者などのイメージがいかに視覚的に具現化され、イメージの共有化が如何に果たされているか？」という点に集約されている。これは、第3章の論考に対し客観的な裏づけと妥当性を与えるものとして評価されよう。

第5章「イメージを具現化に導くための言葉の形象化」では、図面という設計言語を持たない構想、企画、計画段階で、パースがどのように制作されていくか、そのプロセスに関し、記録された事例24ケースを用い、検証、分析を重ねている。本論文のなかでは最も核心の部分といえる。ここでは、言葉の形象化過程、すなわちパースの製作過程を6段階（伝達、キーワード検出、構想、展開、総合、評価）に構造化して、フローチャートとして明らかにしている。このプロセスはパース以外の造形創作活動と共通するものであることを指摘している。

この中で特筆すべきことは「模倣と独創」という創造の根幹に関わる課題について言及している点である。それは、言葉のやり取りにおいて、「具体的言葉」だけでなく、「抽象的言葉」の介在が、イメージを発展、転嫁、変質させ独創性に結びつける役割となっている、と言う実態について指摘していることである。この操作と扱いがパース制作者に求められる能力の特性であり、かつ必要な技能要素である、としている。この指摘と発見は卓見といえる。

第6章は芸術的表現上しばしば取り上げられる「強調と省略」に関する課題を透視図においても同様にとりあげている。

ここでは「リアル—デフォルメ」、「アクティブ—パッシブ」、の2軸をもちいて「イメージスケール」の発想が展開されている。このアイデアは今後さらに検討、熟成させることによって、具体的実務への適用、あるいは透視図作成の教育などにも利用できることが期待される。

以上、本論文では、建築透視図という従来、ほとんど研究領域としては技法、図法解釈以外に取り上げてこられなかった分野に対して、一条の光を当てたものとして、その意義と功績には大きいものがある。

その結果は、独創性に富んでおり、この分野における新たな地平を開いたものと評価される。また、複雑多岐にわたる内容を巧妙に解体、分析し再構築して主題の本質までに迫っていると判断される。とりわけ、創造の根源までに言

及した点については注目するところである。

論文構成や論旨に矛盾や混乱はみられず、よく整理されて精緻にまとめられている。

以上、宝塚造形芸術大学大学院博士課程、課程博士論文（芸術学）として、適格であることを、報告する。

#### 学位審査結果の要旨

従来は技術や技法としてのみとらえられていた建築透視の本質を明らかにし、特にその企画構想段階における透視図の制作プロセスが制作構造に関し、豊かな経験の中から、独自の知見や見解を提示したことは、大きな成果である。格別に大きな問題や課題はみあたらず、適当であると判断できる。